

# エンタ目

笑福亭 たま

大阪の落語家は短命だ。大阪の落語家の平均寿命は、以前、桂小春団治師匠が調べたところによると五十代前半らしい。今年十一月九日に先輩の噺家・桂三金師匠が亡くなった。享年四十八。あまりにも早い死だが、余計に平均寿命の正確さがわかる。われわれ噺家は亡くなった噺家のエピソードをしゃべり、皆の記憶や記録に残すのが商売だ。「桜を見る会」の運営者は、すぐに記録を廃棄するのが仕事かもしれないが(笑)。

三金師匠は元々銀行員から噺家になったので「どちらも口座(高座)を大事にしております」というのをツカミにしていた。体重二二〇キロで、

## ■ 桂三金師匠亡くなる ■

体脂肪率が50%を超えており、デブネタ・大食漢ネタで爆笑を取っていた。「デブはちよつと走っただけで、ゼエゼエハアハア、ものすごい空気を吸うように見えますが、その分、寝たら無呼吸です：つり合いは取れてます」などのギャグは必殺だった。高座だけでなく、打ち上げでも師匠の六代文枝師匠から「最初の一杯目は何にすんねん」と聞かれ、「うどんで：」と答え笑わせたという。三金師匠がごはん屋さんで定食を一人前言うつと、ウエートレスが帰らず、「あの、ご注文はそれだけでええですか」と聞き返されたとか…。そんな三金師匠のデブネタは自虐に徹し、他人を傷つけず、皆から愛された。

## 愛すべきデブネタ 永遠

桂三金師匠の定番ポーズをする筆者



人のひつぎが大きく、式場のあたる二階からは出棺できませんので、一階からの出棺となります」に場内は泣きながら爆笑した。すごい芸人だ。

本当に人間はいつ死ぬかわからない。だから「好きな人には会いにいとかなアカン」と落語会の楽屋で言うつと、誰かが「ほな嫌いなやつは殴りにいとかなアカン」「そんなアホな」と笑うのが、落語家だ。三金師匠は死ぬまでどころか死んでからも、爆笑させていた。三金師匠のお葬式での出来事。出棺の時に場内アナウンスが「故

十六日) 語家の平均寿命で言えばあと十年。もういつ死んでもおかしくない。落語のせりふにもあるが、「思い立ったが吉日、出た日が命日」だ。このエンタ目の文章も、私の落語も、これがいつ最後になるかわからないので、お見逃しなく。皆さまも毎日を大切に お過ごしください。(落語家 次回掲載は一月

私は現在四十四歳。大阪の落